
初めては幼なじみ

亜果利

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初めては幼なじみ

【Nコード】

N5429Y

【作者名】

亜果利

【あらすじ】

高校一年生の高井沙都は、彼氏が出来たその日に、隣に住む幼なじみの畑野涼に押し倒されてしまう。

そして、涼と結ばれ、涼への熱い思いに気づく。

彼氏ができたんだ（前書き）

幼なじみとの恋。
複雑な恋愛です。

彼氏ができたんだ

「涼―。聞いて―」

わたしこと、高井沙都は、学校帰りの制服のまま、隣に住む幼なじみの畑野涼の部屋のドアを開けた。

「なに？」

涼はベッドの上にゴロンと横に寝そべって、モンハンしていた。

「あのさ、わたし、彼氏ができた」

わたしの言葉にチラリとこちらを見た涼は、ゲームをやめてベッドからおきあがった。

「彼氏？」

「うん。となりのクラスの青木文也くん。野球部だよ。涼はサッカー部だから、グラウンドで見たことあるでしょ？」

そういうながら、涼のとなりにチョココンとすわって、陽に焼けた顔をのぞき込んだ。

「なんだよ……それ」

「え？」

「沙都、おまえ、そいつが好きだなんて言ったことなかっただろ？」
涼が手にもっていたPSPをベッドにほうりなげた。

「うん。だって、今日告白されて、初めて青木クンのこと知ったんだもん。なかなかイケメンだし、カッコイイって思ったから」

「はあ？ なにそれ？」

いつも、ボウってしている涼がきゆうに怖い顔をした。

小さい頃から毎日会ってて、同い年で、小、中、高全部一緒に、わたしの言うことを聞いてくれてた涼が……

わたしをにらみつけた。

「いいじゃん。別に。わたしのこと好きだって言ってくれたんだもん」

にらんでいる涼から目をそらして、そうつぶやいた。

「自分のこと好きだって言ってくれた男なら誰でも付き合うのかよ」
「誰でもって、わけじゃないけど……」

「その青木ってヤツがカッコよかったからか？」

「うん。まあ……そんなかんじかな」

「おまえ、それでいいのかよ」

いきなり、もの凄い力で、右腕をつかまれた。

「いたい。いたいよ。涼……」

「そいつが、こんなふうに、腕つかんできたらお前、どうすんの？」
いつもの涼じゃなかった。

色素のうすい、茶色がかった目を大きくみひらいて、こんどは左腕をつかんできた。

「青木くんはこんな乱暴しないよ」

首を振って抗議した。

「お前、そいつの彼女になるんだろ？これくらい覚悟しといたほうがいいんじゃない？」

ベッドに両膝をついた涼が、わたしに顔を近づけてきた。

「わたしに彼ができたからって、逆ギレしないでよ」

「逆ギレ？」

「自分は彼女いないからって、当るなってこと。涼だって、この前告白された子と付き合えばよかったんじゃない」

すると、わたしの両腕を持ったまま、そのまま、おおいかぶさってきて、わたしはベッドの上に押し倒された。

涼と結ばれて

倒れ込んでも、涼はわたしの両腕をベッドに押し付けたまま、はなさない。

手首を強くにぎったままだ。

「俺は、沙都みたい……誰でもいいなんて、どうでもいい気持ちで女と付き合えないんだ」

「それなら……わたしに当ることないじゃんか。はなしてよ」

そう言って、眼の前十センチまで顔を近づけてきた涼をおもい切りにらんだ。

「バカヤロウ！」

耳元でどなりつけてきた。

「耳元でそんな大声出さないでよ」

すると……涼が、きゆうに泣きそうな顔をして

「俺の気持ち、お前……本当にわかんないの？」

目の前の涼のうすい唇が震え出した。

「涼……の気持ち？」

「沙都が、コンビニのプリン食べたって言ったら買ってきたり、沙都の好きなアイドルのビデオ予約したり、眠いのに、女友達とケンカしたお前の悩みきいたり……俺は……お前のなんだったんだ？ 兄妹か？ やっぱ……ただの幼なじみなのか？」

「涼……」

涼の切れ長の目からポロリと涙がこぼれた。

そして、わたしの頬にポタリと落ちた。

「俺は……ずっと……沙都が好きだったんだ」

そう言った涼が……

はじめて

男の子に見えた。

ただの幼なじみの涼が……

男に見えた。

わたしの方がずっと背が高かったのに、いつのまにか追い越されて……

それでも、ずっと涼はわたしの幼なじみだと思ってた。

なんでも、わたしのことが分かってくれて、言うことを聞いてくれる、都合のいい幼なじみだと思ってた。

そして、今、男の顔で泣き出した。

サッカーしているときの真剣な顔とはまた違う、初めてみる涼の男の顔。

ゆつくりと、わたしの腕をはなしてくれた。

つかまれていた手首がジンジン痛む。

震えながら、涼のほほに手を伸ばした。

「涼……」

もうひとしずく……涙が落ちそうで、それを指ですくった。

「だから……好きでもないヤツと付き合ったりするなよ」

「涼……」

「沙都が……ほかの男にキスされたり、抱かれたりするのを想像するだけで……俺、発狂しそうだ」

「涼……発狂なんかしないでよ」

「沙都……」

涼がゆつくりと顔を近づけてきた。

唇が重なった。

まさかのファーストキス。

「イヤだって……言わないのか？」

目を閉じたまま

「言わない……よ」

そう返事をすると同時に、

フワリ、フワリと重なっては離れて……

そして、だんだん重なっているほうが長くなって

口の中に舌が入り込んできた。

何度も何度も舌を絡めて来て、離れる度に、吐息がもれて……
「あっ……涼……」
何も抵抗できなかった。

涼と結ばれて

涼の唇が首すじにおりてきて、手のひらは制服のブラウスの上から胸に触れてきた。

ゆっくりと、優しく、胸にタッチされて、頭のなかがボウっとし始めた。

「あ……涼……」

「沙都……沙都……好きだ」

耳元でそうささやかれて、涼の広い背中に腕を回した。

「涼……」

ブラウスのボタンを一つ一つ外しながら、涼はわたしにキスの雨を降らした。

「沙都……俺……とまんねえ」

ブラウスをはぎ取られて、ブラの上から、手のひらで胸を包まれた。さすがに恥ずかしかったけど、振り払うなんて考えなかった。

唇をふさがれたまま、背中のブラのホックを外された。

ブラによって形づけられていた胸がフワリと緩んだ。

涼の唇が下に降りてきて、胸にキスをする。

少し、茶色掛った髪の中に指を入れて、恥ずかしさをまぎわらした。からだ中が火照りだした。

涼によって、だんだん心が熱くなり、大きな息を漏らした。

じわじわと汗がにじんで。

涼の匂いがこんなに近くに感じられて大きな安心感に包まれているのが分かった。

きっかけなんて、こんなもんだったんだ。

いつもそばにいた涼の体温がこんなに間近で感じて、イヤなどころか、

身体中がもっと、もっとと叫んでいるように涼を欲しがった。

決定的な何かがなければ、わたしと涼はいつまでも平行線で、交わ

ることなど無かった。はず。

「あ……涼……」

「沙都……沙都への思いは……中途半端な思いじゃないから」
涼の声に閉じていた目をゆっくり開いた。

お互い……何もまとわない、裸のままだった。

いつもそばにいて、兄妹のように育って来た。

一緒に、こんな風に裸になってお風呂に入ったことさえあった。

何年前だろう？

まだ、十六歳同士だけど……わたしたちはいつの間にか大人になっていた。

誕生日は涼の方が早かったけど、わたしのほうがいつも涼を引っ張って来た。

泣き虫だった涼の身体は、とても筋肉質で、大人の男の身体だ。

それとは逆にわたしは胸がふくらんで来て、薄着で涼に近づくと、
フイに目をそらしたりした涼に

「スケベ」

なんてからかってきたけど

今は、そんなこと言え無くて……

涼が、わたしを大事に思ってくれているのが伝わって来たから、何も言えず、ただ

涼の思うままに。

身体をゆっくり開いて……

涼と一つになった。

「沙都……沙都……好きだ。俺、沙都が好きだ」

耳元でなんともささやいて来た。

痛くて歯を喰いしばった。

顔をしかめたわたしに、優しく何度もキスをしてくれた。

でも、とても幸せな時間だった。

涼の甘い吐息に頭がクラクラして来た。

力強くて、優しくて……涼が愛しくて仕方がなかった。

涼に抱かれて

二人だけの涼の家で、気が付けば窓の外はオレンジ色が消えて、薄紫に変わっていた。

「さ……沙都？」

涼がわたしの髪の毛をかきあげて来た。
わたしは涼のベッドにうつ伏せのまま。

「沙都？ 大丈夫か？」

涼があんまり優しい声でそう言うから涙が込み上げて来た。

「もうすぐ……母さんが帰ってくる」

「うん……」

涼の顔が恥ずかしくて見られなかった。

「お前……断われよ」

「……」

「青木なんかと付き合うなよ」

「じゃあ……涼が彼氏になってくれるの？」

枕に顔を押し付けてそう言った。

「今さら……だよな」

「え？」

「今さら、沙都和付き合ってますなんて、宣言しにくい」

「はあ？」

「お前、クラスのみんなに言えるか？ 俺が彼になったって。父さんや母さんたちにいえるか？」

いつもみんなでつるんでいるメンバーが頭に浮かんだ。

そして、自分の両親の顔も頭に浮かべた。

この上なく冷やかされるに決まっている。

「確かに……言いにくい」

「オヤジには、結婚相手がいなかったら沙都にしろとか冷やかされてるし……そのまんまだし、シヤクにさわる」

「沙都、ほら、早く服着ろ」

涼が制服のブラウスを放り投げて来た。

「涼……ブラがさき。取って」

枕に顔を押し付けて、腕だけ涼に差し出した。

「ブラって……」

涼がベッドの下に落ちたブラを拾って渡してくれた。

「沙都……意外と、胸あんだな」

「きゃー！きゃー！思いたさないでよ」

そう叫んで薄手の布団を頭からかぶりこんだ。

「もう、涼の頭からわたしを消してー」

「ごめん。そう、怒んなよ」

「怒る！メツチャ恥ずかしいんだから！」

「俺……沙都がなんて言おうと、今日のことは一生忘れないからなかぶり込んだ布団から少しだけ顔を出して

涼を見ると、わたしの視線に合うようにしゃがんで、じっと顔をのぞき込んできた。

「俺、今日の沙都、絶対忘れないから」
チュッ

顔だけ出したわたしの額に軽くキスを落として来た。

「俺らさ、内緒で……付き合おう」

「内緒で？お母さんたちにも？」

「うん。内緒で……」

涼のわたしを見る目が昨日までと全然違ってた。
全然違って……

とっても優しくなった気がした。

薄紫色の部屋の中で、涼がニコリと微笑んだ。

「俺、下にいるから。その間に服着ろよ」

それだけ言って涼が部屋を出て行った

涼の家で食事

着替えを終えて、階段を降りると、玄関先で涼のお母さんとはち合
わせた。

「あら、沙都ちゃん。来てたの？」

「あっ……うん。ハハハ、今日の宿題どこだったかな？ って涼に聞
きに來たの」

多分、今までで一番顔が引きつっていたと思う。

冷や汗が出てきた。

「涼は部屋？」

「ううん。リビングにいると思うけど」

「そう。沙都ちゃん、夕飯食べる？ ほら、ケンタッキー買ってきた
の」

涼によく似たお母さんがニコリと笑ってフライドチキンの入ったレ
ジ袋を見せた。

さすがに今夜はここに居たくない。

「イヤ……いいかな」

「あれ？ 珍しいなあ。沙都ちゃんが遠慮するなんて。ほら、食べて
きな」

涼のお母さんに背中を押されて、リビングに入ると、ソファに座る
涼と目が合った。

血が逆流。

顔が熱くなって沸騰しそうだった。

涼に……さっき、裸見られたんだ。

涼は平然とした顔で、目を逸らす。

「あれ？ もしかして、二人ケンカでもした？」

涼のお母さんがわたしと涼の顔を交互に見る。

「ケンカなんかしてないよ。なあ？」

涼がチラリとこっちを見て、直ぐ目をそらす。

「うん。うん。ケンカなんかしてない」

「そう？ ヤケによそよしく見えたから」

涼がテーブルの上の新聞を手にして顔を隠して

「それより、俺、腹へった」

涼……お願い。そのままずっと顔を隠してて。

夕飯のしたくができて、涼と隣同士で椅子に座った。

わたしの目の前には涼のお父さんがニコニコした顔。

涼のお父さんはわたしがここに来るといつも上機嫌だ。

でも、今夜はなんか、ぎこちなくて、ソワソワしてしまう。

前も見れないし、隣の涼の顔も見れない。

モクモクとご飯を食べた。

「沙都ちゃん、元気ないね。どうかした？」

「いえ……なんもないです」

「いつもの食欲がないんじゃないのかい？」

涼のお父さんがニコリと笑う。

わたし、いつもそんなに食べてるのかな？

「ちよつと……ダイエット中で……」

「もしかして……沙都ちゃん彼氏出来たとか？」

「そ……そんなじゃないです」

「沙都に……彼なんか、できるはずないじゃん」

涼がポツリと呟いた。

「あゝ。わたし、友達から電話が掛けて来るんだ。携帯を家に置いて来たから、帰ろうかな」

そう大声を出して、立ち上がった。

「ごちそうさまでした」

「イエイエ。涼だって、沙都ちゃん家で、食べたりするんだし、また、夕飯食べに来てね」

涼のお母さんが、そう言ってお茶を飲んだ。

「俺、ちよつと……コンビニ行って来る」

わたしと同じように涼が立ち上がった。

涼と二人、玄関を出ると、フイに涼が腕を掴んできた。

「沙都……お前、意識しすぎ」

「当り前じゃんか」

「あのさ……もしかして、後悔してるのか？」

涼が顔を上げて、わたしをジッと見つめてきた。

下を向いて顔を横に振り

「ううん。後悔……してない」

「そっか。それなら良かった。沙都……明日、学校終わったら部屋に来いよ」

「部屋？」

「俺の部屋。明日も、母さん帰りが遅いし」

毎日通ってた涼の部屋。

前の日から来いだなんて、初めてだ。

涼は……わたしを呼んで、どうするつもりだろう？

「絶対に来いよ」

「明日……青木クンと一緒に帰る約束しているんだけど……」

「青木に断るんだろ？」

「うん。その時、青木クンに話そうかと思う」

「じゃあ……その後くればイイだろ？ 俺、待ってるから」

「うん。分かった」

わたしの家の玄関前で、涼と別れた。

その夜、青木クンからメールがあった。

僕の可愛い彼女ちゃんへ
これからはよろしくね。

友達に美味しいケーキの店聞き出したから
あした、学校の帰りにより道しよう。

そう、書かれていた。

青木クンがわたしのことを好きだってきもちがよく分かった。
あしたはなんて言おう。

「やっぱり、付き合えませんか」
そう言うしかなさそうだ。

次の日学校で

次の日、教室に入ると友達の栗木真菜がわたしに飛び付いて来た。

「沙都、おはよ。聞いたよ。青木クンと付き合うようになったんだって？」

真菜の大声が教室中に響いた。

朝連で、先に来ていた涼が、こっちを見てきた。ちよつと怖い顔になった。

涼……

「えー。沙都和青木クンが？」

いつもつるんでる一人が駆け寄って来た。

「じゃあ、みなんでお祝いしようー」

「祝福にはカラオケだね」

何かあると直ぐにみんなカラオケに行きたがる。

涼がまたこっちを見てきた。

胸の奥がキュンとなった。

何も言わない涼。

気だるそうに椅子に座って窓の外を見ている。

上から三個目まで開けた制服のシャツから筋肉質の肌が見えた。

「沙都……好きだ」

昨日の涼の言葉。

あの胸に抱かれたんだ。

あの目に全てを見られたんだ。

そして、あの背中にしがみ付いた。

そう思うとまた、恥ずかしくなった。

「沙都？ ものすごく顔赤いよ。そんなに嬉しい？」

「そ……そうじゃないよ」

必死で首を振った。

真菜の言葉に涼が反応して、またこっちを見てきた。
目を逸らした。

やっぱ、涼の顔まともに見れない。

この場から消えてなくなりたかった。

「男子〜。行きたい人〜」

真菜のこの指とまれが始まった。

「俺行く〜」

涼の隣の席の男子が声を上げた。

「涼も行くだろ？」

当然みたいに涼の名前も出した。

結局、涼を含めたいもののメンバー六人プラス青木クンで、カラオケに行くことになった。

意識し過ぎのわたし

授業中は、全然身に入らなかった。

背中から、涼の視線を痛いほど感じていたから。

実際にわたしを見ていたのか、分からなかったが、変に意識し過ぎているわたしがいた。

昨日のことを思い出しているんじゃないのか？

ブラウスを脱いだわたしを想像しているんじゃないのか？

そんなことを考えると、体中の血液が両耳へと逆流し、象の耳みたいに大きくなり、真っ赤になってパタパタ動いているように思えた。

『沙都の耳真っ赤だ』とか思われているんじゃないか？

支離滅裂なことばかりを考えて、授業を終え、休憩時間に入っても、涼の席を見ることが出来ずにいた。

後を振り返れない。

大きなため息を付きながら、椅子に座ったまま、机に顔をひっ付けた。

消えて無くなりたい……

涼への気持ちは意識して無かった分、かなり自分へ打撃を受けた。

こんなに涼が好きだったなんて……

机に伏せったまま、また、大きなため息を付いた。

その日のお昼やすみ。青木クンからメールが来て一緒に食べないかと誘われたが、そんな気になれなくて、何かと理由をつけて断った。今日は朝から、わたしの彼が出来たとその話で持ち切りだったから、苦しくて一人になりたかった。

青木クンに断りを言っていないのに、みんなに否定出来なかった。

青木クンを出来るだけ傷付けたくない。

人気の無い向かい校舎の二階の踊り場。

大きくため息を付いてしゃがみ込んだ。

「沙都……」

聞き慣れた涼の声がした。

見上げると朝からずっと怖い顔の涼が立っていた。

「涼……」

「あんまり……嬉しそうな顔してんじゃねえ」

「涼……」

「もうちょっとで、俺が沙都の彼だって言いそうになった」

立ち上がって涼の腕を引っ張った。

「涼……青木クン傷付けたくないの。だから……お願い、みんなに言わないで。ちょっと待って」

「沙都……」

腕を引き寄せられて抱きしめられた。

「りょ……」

唇で思い切り塞がれ、いきなり舌を絡めて来た。

腰を引き寄せられ、逃げられない。

「あ……」

昨日、何度も交わしたキス。

また、頭の中がボウっとなった。

涼の顔が恥ずかしくてギュッと目を閉じた。

何度も角度を変えて、カブリつくようなキス。

人が来たらどうしよう。

なんて、言いわけすればいい。

抵抗できないまま、膝の力が抜けそうだった。

「あふ……」

「沙都ごめん……もう、俺、沙都への思いは抑えねえから」
そう言ってまた、唇をかさねてきた。

「涼……」

「沙都は……誰にもやんねえ」

「涼が……好き」

授業開始のチャイムがなるまで、わたしは何度も涼とキスをしてい

た。

いつものメンバーで

部活が終わって、みんなと校門で待ち合わせた。
チアリーダー部のわたしと真菜が一番早かった。

「やっぱ運動部は遅いね」

真菜がポニーテールに結んでいた髪をほどこしながらそう言った。

「うん。後かたづけとかあるもんね」

グラウンドの方を見ると、陽に焼けた青木クンが手を振りながら走って来た。

「沙都ちゃん」

青木クンの笑顔にドキンとした。

でも、このドキンは好きな人に向けてのドキンじゃなくて
彼女になったその日に青木クンを裏切ったわたしの良心が、ドキン
としたんだ。

青木クンの笑顔には、わたしに対しての疑いなどひとつもない。
ドキン

「沙都ちゃん……なんか……みんなからお祝いのカラオケとか聞いて
びっくりした」

そう言いながら、わたしの目の前に立った青木クンはとても嬉しそう。
う。

「うん。ごめんね。いつものグループにつき合わせちゃって」

「ううん。それだけ沙都ちゃんが人気者ってことだろ？」

そう言って……

さり気なく、わたしの手に触れて、握りしめてきた。
これって……

「おう。さっそく恋人繋ぎですか？　な～んか当てられるな～。この
ままじゃ、わたし、完全にオジヤマ虫だな。もう、みんな早く来～
い」

真菜、ソワソワとグラウンドに向けて大声をあげた。

わたしは、青木クンの手を振り払えずにいた。

そして、後悔した。

こうなる前に……真菜にだけでも事情を話すべきだったと。

今日のこのカラオケも中止して貰えば良かった。

いつもの乗りに乗っかって、ズルズル来てしまった。

涼とのことを隠そう、隠そうとする思いが結局何も言い出せず、何も行動出来なかった。

涼とあんなことがあって、正直今日の授業中だって、涼とのことでいっぱいだった。

恥ずかしいのはもちろんだけど、いつもそばにいた幼なじみの涼が急に男の子として変貌したんだ。思い出すだけで胸がいっぱいになった。涼の手とか吐息とか匂いとか、何度も鮮明によりみがえって来たんだ。その度に顔が熱くなって、冷や汗が出て来ていた。

今まで涼は傍にいたけど、わたしから、最低二十センチの距離はずっと保ってくれてた。

たまにジャレあって、身体に触れたりしたことはあったけど、その度にゴメンと言って

謝ってくれてたのは涼のほうだ。

今思えば、涼は確かにわたしに優しくかったし、いつも気を使ってくれてた。

辛い時だって、何も言わず、傍にいてくれてた。

鈍感。

涼の気持ちにも、自分の気持ちにもあんなことが無いと気付かないわたしは、この上ない鈍感女だ。

いつものメンバーで

涼……今のわたしと青木クンを見たら、なんて思うだろう。

どうしよう……

涼とのことで浮かれている場合じゃないのに……

「沙都ちゃんの手、ちいさいね。俺の手、マメだらけでゴツゴツしてるだろう？」

野球のバッドを握るからなのか、確かに手のひらがゴツゴツしていた。

こんなこと言われたら、ますます手を離せなくなった。

次に、校門前に現れたのは、涼と、涼と同じサッカー部西本達樹だった。

「あつれ。沙都、もうラブラブ見せつけてやんの」

達樹のその言葉と同時に涼と視線が絡み合った。

口を一文字に結んで、明らかに怒った様子だった。

思わず、青木クンの手を振り払おうかと躊躇したが、やはり青木クンのことを思うと実行に移せなかった。

涼と達樹の後を必死で追いかけて来た見られる吉村水華が

「なに？ラブラブしたいの？」

そう言いながら、達樹の腕に巻き付く。

水華は達樹の彼女だ。

剣道部の水華は、長い髪を女剣士らしくキリリとしめ上げ、女のわたしから見てもかなりカッコいい。

「沙都、稲本今日はパスだってさ」

稲本和也とは、水華と同じ剣道の男子部員だ。

「えー稲本パス？じゃあ、わたし、今日だけ涼の彼女になろつと」
あぶれていた真菜が涼の腕に巻き付いた。
ドッキン

真菜の行動に今日、一番の胸の高鳴りを感じた。

胸が大きく音を立てて、苦しくなった。

「今日だけじゃなく、ついでに付き合っちゃいなよ」

水華が、達樹の腕に巻き付いたまま切れ長の目をクリクリさせた。

「うーん。でもなあ、涼は二、三年生の先輩たちに超、人気があるしなあ。付き合うとなると厄介だな」

真菜がそう言いながら先輩たちがいらないか、グラウンドの方をうかがう。

「畑野涼くん、サッカー部だね。うちのクラスの女の子たちにも人気あるみたいだよ」

何も知らない青木くんが気兼ねなく涼にそう、話かけた。

「人気なんて無いし……真菜、俺にだって選ぶ権利あんだからな」

涼が不貞腐れた顔で、そう言ってプイと顔を横向け、スタスタ歩き出した。

そう言われた真菜はそれでも涼の腕を離そうとせず、後に続いた。

「俺らも急ごう」

達樹がわたしたちに向かってそう言い、わたしと青木くんも涼を追いかけるように歩き出した。

カラオケボックスで

ルルルルルル　ルルルルルル　ルルルル

少し歩きだしたと同時に、青木クンの携帯が鳴り始めたのか、わたしの手を離して、四、五メートル後に下がった。

別の友達からのようで、嬉しそうに話し始めた。青木クンの電話を立ち止まって、待っていると、前を歩いていた達樹が一人でわたしの方に近づいて来て

「涼さあ。さっきまで部活で、すっげー上機嫌だったのに、ここに来た途端ご機嫌斜めになったぞ。沙都、お前……涼となんかあったのか？」

いつになく真剣な顔の達樹。

「ううん。何もないけど」

「お前らさ……俺にだけは嘘付くなよ。俺と涼と沙都はどれだけの時間一緒にいると思ってんの？別に言いたくないならそれでいいけどさあ。まあ、後で涼を尋問にかけるし」

それだけ小声で言って、一回わたしの肩を叩いて、水華の方へと駆けて行った。

達樹……

涼と一緒に小学校の頃からずっとサッカーをやって来たんだ。

当然、わたしとも長い付き合いだ。

そんな達樹が、わたしと涼の関係にいち早く気が付いても、不思議はない。

達樹に話せば……お前、何やってんの？

そう、言って失笑されるだろう。

カラオケボックスで

青木クンの電話が終わり次第、いつものカラオケ店に向かった。店に着くと涼が先に店員に部屋をかけあってくれていた。

あいかわらず、真菜が涼の腕にしがみ付いて離れていない。

真菜の横顔をうかがった。

とても嬉しそうな顔をしている。

真菜……

もしかして、真菜は涼のことが……

自分の気持ちにも、涼の気持ちにも気が付かなかったわたしが、真菜の気持ちに気付くはずない。

あのアイドルが好きだ、こっちのほうがカッコイイ。そんな、現実味の無い当り障りのない話題でいつも盛り上がっていた。

真菜とも水華とも高校に入学してから友達になった。

友達になって、まだ三カ月しか経っていない。

高校に入ると、達樹に水華という彼女が出来て、それで、少し、テレビの向こうの世界ではなく、真面目にだれかステキな彼と付き合いたいと思い始めていた矢先だった。

わたしにとって、このクラスの仲間はワイワイ言い合うただの友達に過ぎなかったんだ。

だから、涼はだれが好きだとか、真菜はだれが好きだとか、気にも止めていなかった。

昨日、涼と抱き合って、眼の前にかかっていたフィルターが消えてなくなった。

見るものが変わって見え始めた。

そして、大事なモノが……くつきりとしたかたちで、目の前に現れた。

涼……

いつも傍にいた涼の全てが愛しくて、心の底から無言で叫んでいた。

『涼から離れて』

青木クンには悪いと思ったけど、電話が終わって駆け寄って来た時、わたしは手を制服のベストのポケットに突っ込んで、手は繋ごうとしなかった。

青木クンはその話題はスルーしてくれたけど、やはり、気を悪くしたにちがいない。

店員に部屋へと案内され、十名ほど入る個室へと入った。涼は相変わらず不機嫌な顔で、真菜の手を振りほどいてドカッとソファに座った。

涼の隣には、すかさず真菜が……

わたしはそんな涼と真菜に向かい合うように青木クンと隣同士にソファに座った。

達樹と水華は、涼と真菜の隣に座り、早速歌う歌を検索し始めている。

薄暗い部屋の中で、達樹と水華の笑いあう声が響いていた。

青木クンの横顔をチラリと見ると、歌う気は無さそうで、ドリンクメニューを手に使っていた。

達樹がマイクを手にして歌い始めた。いつもなら、涼がこれでもかとヤジを飛ばすのに、今日は一言も声を掛けずに、選曲用のリモコンばかりを弄っている。

わたしも歌う気にもなれず、そんな涼の姿をボンヤリと眺めていた。達樹の歌が済んで、水華、真菜へと続いて、また、さっき歌ったばかりの達樹がマイクを持った。

青木クンは好きな歌ばかりだと言って、みんなの歌を聞き入っていた。

注文したみんなのドリンクが運ばれてきて、それを全て飲みほした頃、青木クンが急に席を立った。

「沙都ちゃん。あのさ、俺、今から同じ野球部の子の家に県大会の日程表のプリントを持って行かなきゃいけないから、これで帰るよ」
「日程表？」

「うん。そいつ、今日は部活を休んだからさ」
すると、真菜が

「沙都も一緒に帰っていいよ。ラブラブして、二人きりで帰りなよ」
気を利かせているんだぞと言わんばかりの勢いで、そう言ってきた。
「じゃあ……沙都ちゃんも途中まで一緒にかえろ？」

立っていた青木クンがわたしの腕を掴んで引っ張り上げて来た。
二人切り……

『ごめんなさい』を言ういい機会かもしれない。
青木クンに付き合えないと断りを言う、絶好のチャンスだ。
だけど……心は、涼と真菜のことが気になる。

真菜に涼を持って行かれそうで……そう思うと胸が苦しくなった。

青木クンに腕を引っ張られたまま、席を立った。

「みんなの沙都ちゃんは俺が責任持って送り届けるからさ」

青木クンが気さくにそう言ってみんなに笑い掛けた。

「沙都。今日はわたしたちの奢りだからね。お金は気にしない
でよ」

水華がニツコリ笑って、手を振ってくれた。

「うん。ありがと。じゃあね」

みんなに手をふる青木クンに、腕を取られたまま、個室の出入り口
ドアの前で涼の顔を窺った。

これでもかと言うくらい、熱い視線を浴びせて来た。

目力が凄かった。

そんな涼と見つめ合いながら、涙が出そうになったが、青木クンに
促されて、個室の外に出た。

二人きりの帰り道

店の外は陽が落ちて、薄暗い紫色の風景だった。街燈がポツリポツリと付き始めて、会社帰りのサラリーマンや下校中の学生たちが歩道を行き交っていた。

その人ごみの中を、青木クンと肩を並べて歩いた。わたしの手はやはり、制服のベストのポケットに手を突っこんだままだった。

わたしより、二十センチ以上も背が高い青木クンが俯き加減で話しかけて来た。

「沙都ちゃんって……西中出身だよ」

「うん。そうだよ。さっきのメンバーの男子たちもみんな西中出身だよ」

「俺さ緑中出身なんだけど。中学の時、一度、西中で練習試合したことあるんだ。その時、沙都ちゃん、何人かの女子たちと応援に来てたこと覚えてない？」

ちょうど一年程まえ、同じクラスだった野球部の子の練習試合をクラスの女子何名かで即席のチアリーダー部もどきを結成して、応援したことがあった。ラメ入りのポンポンなんかを作って、冷やかし半分で、応援したことが……

「行ったことある。あれ、緑中との試合だったの？」

「酷いなあ。応援に来て相手チームの学校も知らなかったの？」

練習試合だし、勝つか負けるかだけしか考えて無かったから、相手チームがどこかあまり気に止めてなかった。

「あの試合で……沙都ちゃんを見て、可愛い子だっと思ってたんだ。自分のチームがミスしても、点入れてもキャッキャッ笑って騒いでたよね」

確かに、応援していたと言うより、騒いでたっけがあった気がする。

「青木クンってポジションどこ？」

「俺？一応ピッチャーしてたんだけど。試合しながら、相手チームのチアリーダーのこと見てたって、それともかなり問題があるんだけどね」

青木クンが照れくさそうに笑った。

結局、あの試合は、うちのチームがボロ負けして、クラスの野球部に女子全員でカツを入れてやった。

その時、野球部たちが言ってた。

『相手のピッチャーが良過ぎたんだ。あいつ、県の選抜ピッチャーだぞ。俺らが打てるわけないだろ？』

その開き直った態度にもう一度、女子全員で激怒した覚えがある。

「高校に入学して、一番先に沙都ちゃんのこと見つけて、あの試合の時を思い出したんだ。だから、こうして、彼女になってくれて、俺、凄く、嬉しいんだ」

青木クンは……中学の頃から、わたしのことを知ってて、それで、昨日、告白してくれたんだ。わたしの彼が出来ればそれでいいなんて、中途半端な、浅はかな考えじゃなかったんだ。

さっきの涼と真菜の二人の光景を思い出した。

真菜に涼を取られたくない。

今……言うしかない。

『ごめん』って言うしかない。

こんなに涼のことが好きなのに……青木クンとは付き合えない。

「ねえ。青木クン……あのね。わたし……」

「危ない！」

後から、通行人の男の人の叫び声が聞こえた。

まさかの事故

その声に驚いたわたしは、青木クンに話しかけるのを止め、声のした方へ振り返ると

いきなり、左側を歩いていた青木クンに突き飛ばされた。

突き飛ばされた勢いで、わたしは歩道の上に両膝を着いた状態で、倒れ込んでしまった。

キィー！

自転車の急ブレーキの音。

少し、下り坂の人が行き交う薄暗い歩道。

ギャシャーアン！

その音と共に、隣にいた青木クンと自転車に乗った、女子高生が一緒に雪崩れ込むように倒れた。

青木クンの腰に自転車の前輪がブレーキの音と共に追突したのだ。

国道と歩道の間に設置されたガードレールに、叩き付けられ地面に倒れ込んだ青木クン。

その背中に自転車と女子高生が折り重なるように倒れ込んだ。

「バカ野郎！」

通行人の男性が、その女子高生に罵声を浴びせた。

「大丈夫？」

中年のオバサンが、倒れたままの青木クンに駆け寄る。

その女子高生の耳にはイヤフォン。

「片手でメール打ってよ。この子！」

駆け寄って来たサラリーマン風の男性の声。

「あなた、無灯火じゃない！」

OL風の若い女性の声。

片手運転の上に無灯火。その上、耳にはイヤフォン。

わたしは身体が震えて歩道にしゃがみ込んだまま、立てずにいた。歩道に落ちたピンクの携帯。

倒れた自転車の後輪だけがカラカラ回る。

その光景を茫然と見ていた。

自転車に乗っていた長い茶パツの女の子が、中年のオバサンに助けてもらってヨロヨロと立ち上がった。

そして……青木クンが倒れたまま動かない。

「額から大量の血が出る。救急車を呼んだほうがいいでしょう」歩道沿いの理髪店のおじさんが音と共に飛びだしてきて、倒れたままの青木クンを見て、サラリーマン風の男性にそう話しかけた。その男性は直ぐにスーツのポケットから携帯を取り出し、操作し始めた。

「あなたは、怪我は無い？」

理髪店の奥さんがわたしの顔を覗き込んでそう、たずねて来た。

身体も、膝も、顎もガクガク震えて返事さえ出来ない状態だった。

青木クン……

額から大量の血……

一瞬のことで、青木クンはわたしを突き飛ばすのが精一杯で……

自分の身を庇えなかったんだ。

通行人が何人も集まってきて、わたしたちを取り囲む。

グツタリした青木クンを見詰めながら涙がワツと溢れて来た。

理髪店の奥さんの肩に凭れかかるようにして立ち上がった。

回りの喧騒とした雰囲気は伝わって来ていたが、涙が溢れた目だけを見開いていた。

倒れた自転車の籠がグニヤリと折れ曲がっていて、どれほどの勢いで追突したのかを物語っていた。女子高生は右太ももと右膝をすり剥いて、血が出ていた。若いOLと中年のオバサンに両脇を抱えて貰ってようやく立っているといった感じだった。

まさかの事故で

理髪店の奥さんの肩に凭れかかるようにして立ち上がった。回りの喧騒とした雰囲気は伝わって来ていたが、涙が溢れた目だけを見開いていた。

倒れた自転車の籠がグニャリと折れ曲がっていて、どれほどの勢いで追突したのかを物語っていた。

女子高生は右太ももと右膝をすり剥いて、血が出ていた。若いOLと中年のオバサンに両脇を抱えて貰ってようやく立っているといった感じだった。

「警察にも通報したほうがいいでしょうね」

救急車に連絡を入れてくれたサラリーマンが理髪店のオジサンにそうたずねた。

「怪我人が出ているんだ。仕方ないでしょうね」

オジサンのその言葉に女子高生が青ざめて震え出した。どこにでもいるわたしと変わらない普通の女子高生。

イヤフォンに肩手携帯。

わたしも何度かしたことがある。

警察……

怪我人……

わたしたちは被害者だけど、決して人ごとではない事態。れっきとした犯罪になるんだ。

理髪店の奥さんに腕を掴まれたまま、また全身が震え出した。

すると、倒れていた青木クンの足がピクリと動き出した。

「君、大丈夫か？」

サラリーマンが足を動かした青木クンに声を掛けた。

倒れたままの青木クンを見ていて、頭の隅で、もしかして死んでいないんじゃないかと震えていたわたしは、青木クンの微量の動きに安

堵しホッとした。

青木クン……

青木クンは起き上がろうとしている様子だったが

「頭を打っているから大事を取って動かさないほうがいい。このままで、救急車を待ちなさい」

理髪店のオジサンがうつ伏せに寝ている青木クンの傍にしゃがんで耳元でそう囁いた。

青木クンは起き上がるのをやめた。

「青木クン！」

我に帰ったわたしは、オバサンの腕をはらって、青木クンの傍に駆け寄り理髪店のオジサンの隣にしゃがみ込んだ。

青木クンの額は血で真っ赤で、短髪の髪には土埃が付いていた。わたしの声に左目だけを薄く開いてくれた。

「お嬢ちゃん、これ」

理髪店のオバサンが理髪店の名前の入ったタオルを差し出してくれたので、それを受け取り、青木クンの額にそっとあてがった。

そんなわたしの顔が見えたのか、口元が少しだけ弧を描いた。

遠くの方から救急車のサイレンが近づいて来た。

周囲を取り囲んでいた通行人たちが、救急車の音に反応して、わたしたちの傍から離れ出した。

総合病院に運ばれて

青木クンとわたしは、二人一つの救急車に運ばれた。

膝を擦り剥いただけのわたしは、青木クンの付き添いとして乗り込んだ。

救急車に乗り込んだ時、救急車の後にパトカーが滑り込んで来て、三人ほどの警官がゾロゾロと降りて来た。そして、女の人たちに支えられていた女子高生を取り囲んだ。

体格のいい警官たちが笑顔一つ見せず、サラリーマンの男性や理髪店のオジサンに話を聞いていた。

それは、とても怖い光景に思えた。

わたしと青木クンは被害者で、怖い思いをしたが、これから置かれるその女子高生の立場を考えると寒気がした。でも、一番不憫なのは、わたしを庇って、怪我をした青木クンだ。

さっきまで、元気にわたしに話しかけて来ていた青木クンだったのに今はぐったりとしたままだ。

担架の上に乗せられた青木クンの手を泣きながら、ずっと握りしめていた。

総合病院に着いて、青木クンは救急搬入口から救急治療室に運ばれた。

救急治療室の前に置いてある待合の椅子に座り、閉じられた扉をジッと見つめていた。

救急治療室の前は薄暗がり、一人切りのわたしは、寂しい思いと、不安な思いが交互して、何とも言えない気持ちになった。

ここに来てからすぐに、警察官と救急隊員に青木クンの身元やわたしの身元を事故の状況などを聞かれた。

ただでさえ関わったことのない人たちの前で、受け応える中で、心ぼ即手、終始震えていた。

取り調べが終わり、わたしは一人、この場所に取り残された。

青木クンをそのままにして、家には帰れない。

どうしよう。

青木クンの身になにかあったら……どうしよう。

そう思うと涙が止めどなく流れて来た。

その薄暗がりの中で、ハンドタオルを眼にあてて泣いていた。

青木クンのお母さんが駆けつけて

しばらくすると、救急搬入口に中年の女性が駆けこんできた。その女性は入口の受付警備員に『青木』と名乗った。

その言葉に立ち上がって、その女性に軽く会釈をした。

「光輝のお友達？」

そう言いながら駆け寄ってきた。

声が出なくて、首だけ縦に振った。

近くで見ると、青木クンに良く似ていた。

青木クンのお母さんのようで、何処かの会社の事務員の制服を着ていた。

「ごめんなさいね。付き合わせたみたいね。自転車の事故だって、警察から連絡があったの」

「青木クン……頭から血が出てて……」

思い出ただけで言葉が詰まった。

すると、救急治療室の扉が開いて、中から女性の看護師さんが二人現れた。

「青木さんですか？」

「はい」

「担当医からの説明がありますので、中に入って下さい」

青木クンのお母さんが看護師にそう促された。

「あの……青木クンの容態は？」

看護師にすぐるような声でそう聞いた。

「ええ。髪の毛の生え際を少し切ってて、そこを少し治療しましたよ。大丈夫ですよ」

看護師が気を聞かせたのかニコリと笑ってそう言ってくれた。緊迫していた心がその笑顔で楽になった。

「青木クン、大丈夫なんですか？」

「出血多くてびっくりしたでしょうが、もう、大丈夫よ」

もう一人の看護師も笑ってくれた。

「色々ありがとうね。ここはもう、大丈夫だから、早く家に帰ってね。お家は遠い？」

青木クンのお母さんがわたしを心配したのか、そう聞いて来た。

「いえ、そう、遠くないです。帰れます」

軽くお辞儀をすると、看護師二人と青木クンのお母さんが救急治療室の中へと向かった。

三人の背中を見送ってから、もう一度椅子に座って大きく息を吐いた。

真菜からの電話そして……

その後、電車を乗り継ぎ、家へと向かった。時間はすでに八時を過ぎていた。

一応、家に電話をしたが、誰もいないのか出なかった。

駅から自宅への道を歩きながら、携帯をカバンに仕舞おうとしてみると、

チャカチャカチャカ

チャカチャカチャカ

真菜のお気に入り曲が鳴り出した。

この着信音は真菜だった。

慌てて出て、耳にあてた。

『沙都？ 今、電話大丈夫？』

明るい真菜の声がした。

「うん。大丈夫だよ」

『あのさ、沙都に言いたくて電話したんだ』

「何？」

『わたし、涼のこと頑張ってみる』

涼のこと……

携帯から聞こえた真菜の声にまた、胸がドキンとなった。

「涼……って？」

『さっきね、家まで送ってもらったの。不貞腐れてて面倒くさそうな顔してたけど、もう、暗いからって、結局家まで送ってくれてさ。涼って優しいね。カラオケでも、ブツブツ言いながら、リクエストした曲は全部歌ってくれたしさ。涼が優しいのは沙都限定だっと思ってたから、なんか、とっても嬉しかったんだ』

弾んだ真菜の声。

わたしと青木クンが帰ってから相当楽しんだように思えた。

確かに涼は優しい。

誰にでも気を使う子だ。

小さい頃から、自分に出来ることは相手を選ばず、優しく出来る子なんだ。

沙都限定……

真菜にはそう映ってたんだ。

涼の気持ちに薄々気付いていた。

真菜は……

涼が好きだったんだ。

そして、わたしに彼が出来たことに寄って、真菜は、なんの気兼ねも無くなった。

（涼のこと頑張ってみる）

真菜の素直な言葉が頭の中でリフレインして、胸が張り裂けそうになった。

『沙都？ 元気ないね。青木クンと何かあった？』

血まみれで倒れていた青木クンが鮮明に思い出された。

今ここで、青木クンの事故のことを話すべきか……

青木クンの今のちゃんとした容態は分からない。

ヘタに大げさなこと言って、青木クンに迷惑がかかるといけない。

小さな噂が大きくなって飛び交うことはよくあることだ。

学校にはすでに連絡が行っているはず。

明日になれば、みんなに知れ渡る。

それからしよう。

今は……言わないほうがいい。

「ちょっと……色々あって……詳しいことは明日話すよ」

『色々？ なになに？ もしかして、キスとかされた？』

「そんなんじゃないよ。そんなんじゃない！」

真菜の見当はずれの明るい声と言葉の内容に声を荒げてしまった。

ツウツウ

ツウツウ

どこからか電話が入ったようで、通話中着信音が鳴った。

「真菜、ごめん。他から電話が入ったから切るね」

真菜からの返答も聞かずに、慌てて電話を切った。

これ以上真菜と話しをすると、涼とのことと青木クンのことが入り混じって、真菜を傷つけてしまいそうだった。

今のわたしには、真菜に対して、当り障りのない相槌を打つほどの余裕がなかったのだ。

液晶画面には、涼の名前。

電話は涼からだった。

涼の部屋へ

通話を切ったので、涼からの電話も途切れた。

着信履歴を探して、すぐ、涼に電話を掛け直した。

「涼？」

『沙都……お前、今どこよ。まだ、帰ってないじゃないか』

「うん。もう直ぐ家に着くよ」

『今から、俺ん部屋に來いよ。お前んちとうちの親、区の集會に出かけていないしさ……それに、沙都、i pod 忘れてるぞ。お前の好きなアニソン入れといてやったから、それも取りに來いよ』

いつもの優しい涼の声だった。

「うん。今から行く」

涼の声を聞いて、また、涙が溢れて來た。

青木クンとのことを聞かれるに決まっている。

わたしを庇って怪我をした青木クンに……

断ることが出来なくなった。

わたしのことを思って、庇ってくれた青木クンに……

断れない。

青木クンに何も言えない……

直ぐに涼に会いたい気持ちと、この重い気持ちとが心の中に入り混じった。

涼になんて言えればいい。

涼になんて……

いつものように、涼の家の玄関のドアを開けると、中では涼が玄関の敲きに立って、わたしを待っていた。

涼の表情は電話で感じたものより、はるかに機嫌が悪そうだった。

「沙都……こんな時間まで、ずっと青木と一緒にだったのか？」

「うん。ちょっと色々あって……」

「色々？ 色々ってなんだよ」

「べ……べつに涼の心配するようなことじゃないから。明日……ちやんと話すよ」

「明日？　どう言うこと？」

涼が勘ぐるように見つめて来た。

「ごめん……今は言えないんだ」

「言いたくないなら言わなくていいよ」

「ごめん……」

そう言うと、

煮え切らないわたしの言葉に愛想をつかしたのか、諦めモードの涼がわたしの腕を取って

「部屋に来いよ」

腕を掴まれたまま、靴を脱いだ。

そして、涼に手を引っ張られたまま、涼の部屋へと続く階段を上った。

部屋に入ると、机の上に置いてあった、ピンクのi p o dを手に取り、わたしに手渡してきた。

「ありがとう……あのアニソン入れといってくれたの？」

「うん。沙都が好きだって言ってたし、今日サッカー部のヤツにC D借りたから」

i p o dのイヤフォンを自分の耳に入れ、操作する。

お気に入りの曲が流れて来た。

ハイテンションの曲。

さっきまでの重い気持ちが少しだけ晴れて来た。

好きな音楽を聴くと、嫌な事も忘れられる。

目を閉じて、曲に聴き入っていると、急に……

背中から涼に抱きしめられて、耳からイヤフォンを外された。

「涼……」

「さっき、達樹からの電話で、沙都とのこと聞かれた。あいつ、確信して質問してくるからさ……仕方なく、昨日の沙都とのこと……しゃべっちゃった」

涼の息が首筋にかかる。

腰に回されていた涼の手が熱い。

「達樹に……喋ったの？」

「沙都はバカだって言ってた」

唇を首筋にくっ付けながらそう言う。

「達樹に軽蔑されたかな？」

「俺たちを応援するってさ。そして、今日のカラオケでの真菜とのことも叱られた。青木と沙都のことで、イラついてたしさ……真菜が勘違いするような態度取るなって、真面目に怒ってきやがった」

「真菜を家まで、送り届けたんでしょ？」

耳に涼の息が掛ってゾワツとした。

「もう、真菜から電話あったのか？　ただ、送ってっただけだし」

涼の唇が首筋を何度も往復する。

「涼は……優しいもんね」

「沙都……もしかして焼いてる？」

「今日は……涼とのことばかり考えてたから……ずっと……授業中も涼のことばかり考えてた」

「俺も……沙都のことばかり考えてた。授業なんか、全然耳に入って来なかったし。それより、沙都……お前、青木に断ったか？」

一番聞かれたくない質問。

涼の腕に力が入り、体中の力が抜け始めた。

（涼のこと頑張る）

急に真菜の言葉がよみがえって来た。

なんの気兼ねもなくなった真菜は、これから涼に必死にアプローチするだろう。

真菜は本気だ。

涼の手のひらが制服の上から胸に伸びてきて、フワリと包まれた。

わたしは青木くんには断れない。

でも、真菜に涼を取られたくない。

涼を……怒らせたくない。

涼の気持ちをこのまま繋げておきたい。

「青木クンに……断ったよ」

口から嘘を吐いて、ゆっくりと目を閉じた。

涼が好きだ

「そっか……。良かった。今日はマジでヤバイとか思ってたし。なあ、沙都……」

声のトーンが急に甘くなった。

「なに？」

「このまま……。続けていいか？」

耳元で優しくそう呟く。

涼に……

涼に大人しく抱かれていたなら……

涼は……わたしを好きでいてくれる。

涼は……ずっとわたしを好きでいてくれる。

このまま、涼に抱かれていたなら

涼の気持ちを繋ぎとめておける。

「いいよ……涼なら、いいよ」

涼がわたしの制服のブラウスのボタンを一つずつ、はずし始めた。

ボタンを全開にして、ベストとブラウスを同時にはぎ取られた。

そして、わたしをフワリと抱き上げた涼は、そのままベッドの上に寝かせて、昨日と同じように覆い被さって来た。

お風呂に入ったばかりだったのか、洗いざらしの前髪から、涼の茶色掛った瞳が見える。

毎日見て来た涼の顔は男の子のわりに小さめだ。くっきりと縁取られた二重の目につんとした澄ました鼻。独特の薄い唇が、意地悪くも見え、幼くも見える。

視線を絡めたままゆっくりと顔を近づけて来て、わたしの唇を塞いだ。

眠るように眼を閉じた。

ついでに、その薄い唇を何度か重ねてから、わたしの唇をこ

じ開け、舌を絡ませてきた。

わたしは涼が好きだ。

こうなることに何の違和感も無かったのは事実だ。

ただ、照れくさくて、恥ずかしくて、それを取り除けば、ごく、自然なことだった気がする。

触れ合う段階が早急過ぎただけで、心はちゃんとお互い繋がっていたんだと確信した。

指と指を絡めるだけでも、涼の気持ちを感じられて、身体中の力が抜ける。

目を閉じて、涼から漂って来るボディークリームとシャンプーの残り香にめまいがするほど酔っていた。

涼の唇がわたしの身体の輪郭を縁取るように下にと滑り降りて来て、両手を生乾きの涼の髪に指を絡めた。

涼ごめん

涼の一つ一つの動作に目を閉じたまま、温もりや息使いを感じていた。

「沙都？」

涼の動きが止まって、名前を呼ばれた。

「え？」

「お前、膝……どうした？ 擦り剥いて血が出てるぞ」

わたしの脛に跨ったまま、涼が驚いたような声を出しそう訊ねて来た。

「ちょっと……転んだ」

「これだけ擦り剥いてたら、痛いだろう？」

「うん。少し痛むかな」

「怪我してるんなら、言えばいいのに。今日はここで我慢するし。ちょっと待ってろ。手当してやるから」

涼がわたしの上から飛び降りた。

そして、床に落ちていたブラウスをわたしに放り投げて来た。

「これ着てろよ」

「手当？」

「足の治療なら任せておけよ。俺、サッカー部だぜ。下へ行って、消毒薬と絆創膏を持ってくるよ」

照れたようにニコリと笑って部屋を出て行った。

静まり返った部屋。

涼のお気に入りのフィギュアが眼に入った。

カラーボードにキチンと整頓されてディスプレイされている。

さっきまで触れていた涼の手の温もりが消えて、蒸し暑い気候なのになぜか寒気がした。

膝に眼をやると涼が驚いたはずで、両方の膝から血が出ていて、黒

い血の塊に土が付着していた。

自分の膝の痛みが分からないほど、気が動転していたんだ。

血を拭くこともせず、このまま電車に乗って、家まで茫然と歩いて来た。

まるで、小さな子供みたいだ。

また、涙が込み上げて来た。

涼に嘘を付いた。

明日ばれるかも知れない、もしかしたら、一時間後にばれるかも知れない嘘を付いた。

涼を失いたく無い。

でも、今は青木クンに断れない。

どうすることも出来ないわたしの苦し紛れの嘘。

わたしは……バカだ。

顔を両手で覆って、俯いた。

「沙都？」

涼の声がして、顔を上げると、タオルや絆創膏や消毒薬を手にして心配そうに覗き込む涼の顔があった。

「泣いてんのか？」

「ううん。何でも無い」

「どうしたんだよ。そんなに痛むのか？」

「ううん。涼……ごめん。怪我してて……ごめん」

俯いたまま、涼に何度も頭を下げた。

「別に怒ってなんかいないし。怪我してたんなら仕方ないじゃん。

俺こそ……昨日の今日なのに、沙都を求めてごめん。今日の青木と沙都を見て、スゲー焦ってて、俺って本当にどうしようもないよな。達樹にさんざん、沙都を大事にしろよって言われたのに。俺がこんな風になるのを見透かして、そう、言ってきたあいつにちよつとムカつくけどね」

涼が笑いながらベッドに腰掛けて、手にしていたタオルを血が出ている膝に当ててくれた。

タオルを事前に濡らして来てくれたみたいで、ひんやりして気持ち良かった。

涼のユニフォーム

器用に手当てをしてくれた後、まだ、タオルケットを身体に巻き付けたままのわたしに

「沙都、その格好、眼の毒」

そう言いながら、部屋の中に置いてあるクローゼットから、青いサッカーユニフォームを取り出してきた。

そして、それをわたしに差し出し

「もう、小さくなって来たしさ。沙都にやるよ。これ着て帰れよ」
涼からユニフォームを受け取り、涼の目の前で腕を通した。

「わたし、中学生の頃の涼と同じまなんだ。ぴったりだな」

涼がベッドの端に腰をドスンとおろして

「俺さ、沙都の背を追い越した時、スゲー嬉しかったんだ。これで、沙都に似合う男になれたかなとか思ってたさ」

そう言って照れくさそうに笑った。

「わたしは、逆に涼のくせに生意氣—とか思ってた」

「涼のくせになってなによ。それ、酷くね？」

「だって、涼、よく泣いてたじゃん。小学校の時なんか、好きだった男の先生が転勤になったって離任式のとき泣いたりしてたし」

すると、両手をわたしの頭の上に乗せて

「お前、そんな昔のことよく、覚えてるな。こうしてやる！」

ベッドの上のわたしに乗っかって来て髪をクシャクシャにしていた。

「ちょ……なにそれ？　ここまでする？」

体制を立て直して、今度はお返しに、わたしが涼の頭を両手で持って髪をクシャクシャにしてやった。

髪をクシャクシャにしたままの涼が笑いながら、わたしを押さえこむように抱き付いて来た。

「沙都、仕返しすんじゃないねえ。力も負けないからな」

両腕を取られて身動きが取れなくなった。

「クソ……力も負けてる。悔しいー」

両腕を解放して今度は優しく抱きしめて来た。

「沙都、俺さ……沙都と思いが通じて本当に嬉しいんだ。今、スゲー幸せ。昨日だって、夢見ているんじゃないのかって、信じられなかったから」

その言葉に心がギュッと何かに掴まれる感じだった。

身体が震え出しそうで、涼の背中に腕を回して抱き付いた。

「わたしも……嬉しかったよ」

わたしはこんなに無邪気に笑う涼に……

嘘を付いている。

帰り際、玄関まで出て来た涼に

「涼、このユニフォーム今夜からパジャマに使っていい？」

そう言ったわたしにまた、嬉しそうな顔で

「沙都にあげたから、沙都の好きなように使えよ」

「うん。ありがとう」

それだけ告げて、涼の家を出て、自宅に帰った。

待ち伏せ

その夜は、涼から貰ったユニフォームを着て眠った。

タンスの奥に仕舞っていたみたいで、防虫剤の匂いが微かに臭っていたけど、明日のことを考えると不安で仕方なかった。

サッカーで使った物は捨てられない性分の涼が、捨てるに捨てられず、かと言って後輩たちに譲ることも出来ずにいた、このユニフォームには特別な思い入れがあったのだろう。

そんな物をわたしに譲ってくれた涼のこの思いに抱かれたまま眠りたかった。

青木クンの怪我が治れば、ちゃんと自分の思いを青木クンに告げよう。

それまで、涼を騙し続けることになるけど、涼を不安にさせたくない。

もし、本当のことが分かれれば、中途半端なわたしに愛想を尽かすかも知れない。それだけはイヤだ。せっかく思いが通じあったのに、涼を誰にも渡したくない。

瞼を閉じたまま、眠ることも出来ず、そんなことばかり考えていた。

次の日、朝連に出かける涼を自宅の玄関の前に立って待ち伏せした。

一年生の涼は、朝連当番の日は先輩たちより早く登校しないといけない。

この時間は学校の最寄り駅へは電車がなかったので、学校までの七キロの距離を自転車で通う。

ガレージから、自転車に跨った涼が出て来た。

玄関先で立っているわたしに一瞬驚いた顔をしたが、直ぐに嬉しそうな顔をして

「あれ？ 沙都どうした？」

「おはよ。お化けでも見たような顔して驚かないでよ」

「そりゃ驚くだろ？ 毎朝、ギリギリじゃないと登校しない沙都が俺より早く支度して待ってるなんて、真夏に雪が降るより珍しいじゃん」

そう言いながら、朝日が差し込む空を見上げ、眩しそうな顔をする。

「一緒に行っていいい？」

「それって、俺に後へ乗せろって、言ってるの？」

「うん。サッカー部は足を鍛えなきゃ」

「警官に注意されるようなトレーニングは禁止なんだけどな。しゃあねえな」

「ヤッター」

肩に掛けていたカバンを自転車の籠に、これでもかと言うくらい押し込めて、後に飛び乗った。

「言っとくけど、飛ばすからな」

「うん。了解！」

勢いよくこぎ出した涼の腰に手を回して、しがみ付いた。

涼との二人乗りは初めてじゃない。中学生に上がったばかりの頃、仕立てたばかりの新品の制服で二人乗りして、河川敷を滑り降り、そのまま川へと飛び込んだことがあった。

新品の学生服とセーラー服がビショビショになった。

あの時は、涼が悪い、沙都が暴れたからだと擦り付け合いばかりして、二人して、お互いの親に怒られたことがあった。

あの頃は、男とか女とかまったく意識してなくて、高校生になった今でも、あんなことがないと、涼を男として見ていなかったんじゃないかと思う。

この前、青木クンに付き合ってくれと言われて、背が高くて、なんてカッコイイんだろうって、素直にそう思った。

野球部と聞いて、尚更カッコ良く見えた。

男の子のわりに清潔感があって、照れて笑うところが可愛くて、直ぐにOKの返事をした。青木クンをTVの中のアイドルみたいな目で見ていた気がする。

彼が、どんな子かも知らない癖に、安易に返事をした。

青木クンがどれほど自分を好きでいてくれたかなんて、想像すらしなかった。

涼に押し倒されて、やっと、自分の非力さや、軽い部分に気付いた。

相手が、涼じゃなきゃ気付かなかっただろう。

わたしは、涼が好きだ。

涼の傍で今までと同じようにずっと笑っていたい。

涼の夏服のシャツに頬を寄せた。

「沙都？ お前、こんな時間に登校して、学校で暇だろ？」

「うん。涼の練習見て、時間を潰すから」

「俺のプレー見て惚れなおすなよ」

「惚れなおさないし」

そう言うっては両腕に力を入れて、もう一度涼の腰にしがみ付いた。

二人乗り

背中から、真夏の朝の日差しが暑いほど感じられた。涼の白いシヤツが反射して、眩しいくらいだった。

国道沿いをしばらく走ってから、近回りでもある公園の中へと進路を変える。

人もまばらなこの時間。犬の散歩をしている人たちとすれ違う。眠そうな人もいれば、犬と一緒に走っている人もいる。

両側の桜の木が立ち並ぶ細い遊歩道。

涼の自転車はスピードが落ちない。吹き抜ける風が心地よくて目を細めて涼の背中に頬をピタリとくっ付けた。

公園を横切って、上り坂に入った。自転車のスピードが落ち、涼の息使いが聞こえ始めた。

「涼……大丈夫？」

「かなり……きついけど、頑張る」

腰を上げようとしたので、涼の腰から手を離した。

自転車は蛇行しながら、どうにか坂を上り切った。

「さすが涼だね」

「沙都、お前、重くなってないか？」

逆に下り坂になって余裕が出て来た涼が、そう、突っ込んできた。

「失礼ね。体重は中学の頃と変わってないから」

「そっかあ？ 俺の体力が落ちたか、沙都の体重が増えたのかどっちかな」

「涼の体力が落ちたの」

「そっかな？ じゃあ、これから朝連当番の時は違反トレーニングに付き合ってくれよ」

さりげない、涼からの誘い。

「付きあって上げてもいいよ。協力する。涼の足を鍛える為、もっと太って重くなるから」

「それだけは勘弁してよ。別に太らなくていいし。沙都はずっと、そのままでもいいよ」

そう声を荒げて、さらに勢いよく自転車をこぎ始めた。

野球部のマネージャー

学校近くの売店前で、涼がこぐ自転車の後から飛び降りた。

さすがに校門までは二人乗りは出来ない。

「まっ適当に授業始まるまで時間潰せよ」

「うん。取りあえず教室に行ってカバンを置いてくる。それから、サッカー部の練習でも見学しようかな」

「じゃ、俺行くわ」

肩手を上げて、一人で自転車をこぎ出し、校門へと向かった。

わたしはカバンを肩に掛け直して、ゆっくりした歩調で歩きだした。

校門を抜け校舎内に入り、玄関で上履きに履き替え、自分の教室へと向かう。

一年生の教室は北側校舎の一階にあった。さすがにこの時間は誰も登校していなくて、教室へと続く廊下はシーンと静まり返っていた。

北側校舎はグラウンドに面しており、窓からは朝連に集合したサッカー部員や野球部員の姿が見えた。

野球部員の姿が目に入ると同時に青木クンのことを思い出した。

さっきまでの涼との楽しい時間が一変して、心が灰色に変わり、暗いものになった。

その場に立ち止まり、グラウンドから目を背けた。背けた先は、1ー5と書かれたドア前。

青木クンのクラスだった。

ボンヤリとした顔で、1ー5と書かれたプレートを見ていると急にドアが開かれた。

ドアが開いた音に驚いて肩を窄めた。

1ー5の教室の中からは涙ぐんだ女子生徒が飛び出て来た。

廊下に立っていたわたしとはち合わす格好になった。

女子生徒は運動部員のようにジャージ姿だった。

サッカー部か野球部しか朝連は行っていない。

どちらかのマネージャーのように思えた。

涙ぐんでいたその女子生徒が、わたしの顔を見るなりもの凄い血相となって

「この、厄病神！」

そう怒鳴りつけて来た。

「高井沙都ってあんたよね？　この前、光輝の彼女になったばかりの女でしょ？」

目を見開いて、余裕の無い表情の彼女から目を離せなかった。

開かれた目は明らかにわたしに敵意を抱いていた。

「光輝、せっかく県大会の控え投手に選ばれたって喜んでいたのに……光輝のお母さんに聞いたんだから、光輝はあんたを庇って怪我したんでしょ？　なに平気な顔して登校してきてんのよ！」

あんたのせいで、光輝は試合に出られないんだよ！」

ドン！

そう捲し立てて、わたしの胸を思い切り突き飛ばしてきた。

その衝撃で、勢いよく窓ガラスに背中を打ちつけられた。

「光輝が今までどんな思いで頑張ってたと思ってるの？　光輝の

お母さんは、あんたを庇って怪我をしたことは誰にも言わないでっ
て口止めして来たけど、あんたと付き合い始めて次の日にこんなこ
とになるってどう言うことよ！　厄病神、厄病神、厄病神！」

窓ガラスに凭れかかっていたわたしの腕を掴んで、今度は廊下の
床へと突き飛ばして来た。

抵抗すらしなかったわたしは、床に這いつくばるような格好で倒
れ込んだ。

「光輝は……どうしてあんたなんか好きになったんだろ」

吐き捨てるようにそう言って、わたしに背を向けて猛スピードで
走り去って行った。

達樹に励まされて

まだ、誰も登校していない、静まり返った廊下に頬を打ちつけたまましばらく寝転んでいた。

廊下の端に埃が見えた。高校生になると、みんな掃除を真面目にしないので、大人数が行き交うこの廊下はいつも埃が舞っている。そんな状態の場所に、寝そべったままだった。あの子は野球部のマネージャーだろうか？

あの子に怒鳴り付けられたショックで、身体動かなかった。窓の外からは、野球部員かサッカー部員のかけ声が微かに聞こえた。

昨日、擦り剥いた膝が痛む。膝の痛みを庇いながら、ゆっくり起き上がる

「沙都？」

視線の先には、黄色と青のストライプのサッカースパイク。

顔を上げると、ユニフォーム姿の達樹が心配そうな顔で立っていた。

「達樹……スパイクのまま校舎内に入っちゃダメじゃない」

「沙都、あの野球部のマネージャーに突き飛ばされていたら？外から見ていて、それで慌てて、ここへ走って来たんだ。お前、大丈夫か？」

そう言って、手を差し伸べてくれた。

「うん……ちょっと怖かったけど」

達樹の手につかまり、立ち上がって、スカートとベストについた埃を叩いた。

「さっき、学校に来るなり聞いたんだけど、昨日、青木が事故にあって、怪我したんだってな」

達樹の言葉に茫然となった。

もう既に話は広まっている。野球部員も来ているから、サッカー

部に話が漏れても不思議は無い。

「沙都？お前……その事故の時、一緒にいたんじゃないのか？」

わたしの膝に視線を落したまま達樹が声を上げた。

心配そうな達樹の顔を見るなり、涙がワツと溢れ出て来た。

「達樹……どうしょ。わたしのせいで、青木クン、試合に出られないって……わたしのせいで……」

「わたしのせい？」

「うん。青木クン……わたしを庇って……」

泣きじゃくるわたしに困った表情を浮かべた達樹が

「なあ、沙都？ 涼とのこと、青木に話したのか？」

嗚咽を吐きながら、首を横に振った。

「言っていない……青木クンに断ろうとした矢先だったの。でも……涼には嘘付いた。ちゃんと断ったって直ぐにばれる嘘付いた」

「ハァー」

達樹が大きくため息を付いてわたしの肩を二度叩いて来た。

「まあ、涼のことは気にするな。お前のそんな嘘ぐらいで、臍を曲げるようなヤツじゃない。そうじゃなきゃ、こんなに何年も沙都に片思い出来るわけないだろ？ 問題は青木だろ？」

涼のことは気にするな……

達樹のその言葉はとても有り難いものだった。

声にならない声を上げて、大きく頷いた。

そうだ。涼は……こんなことで、わたしを嫌いにならない。

ずっと、一緒にいたんだから、こんなことで涼はわたしを嫌いにならないけど、青木クンをこんな状態で付き離せない。

「青木クンに……断れないよ」

「なあ、沙都。あのさ、お前、青木に対して、どれだけ容量しめてんの？」

「えっ？」

「青木に対する容量だよ。だたの情だけで10%未満じゃない？」

昨日、今日付き合いだしたばかりでさ、青木の心の中も沙都への容

量なんて、多くて30%だろ。50%は野球だろうしさ。そんなもんじゃないのか？」

達樹の言い出した言葉の意味が分からなかった。

「さっきのあの、マネージャーの態度見ているとあいつ、青木に対してかなりの容量のしめているぜ」

「どう言うこと？」

「お前は青木の心配ばかりしているけど、青木をお前以上に心配しているヤツがいるってこと」

「あのマネージャーってもしかして青木クンのこと……」

「サッカー部と野球部って毎日の練習時間は、ほぼ一緒なんだよ。だから、傍から見ているとよく分かるんだ。あのマネージャーがどんな目で青木のことを見ているかって。これはさ、涼に対しても言えるんだぞ。チアリーダー部が部室から出てきて、体育館に向かう時なんか、ボール見て無いもんな。あいつ」

達樹が思いだしたように豪快に笑い出した。

「達樹……」

「お前が無理して支えなくても、青木にはちゃんと支えてくれる子がいるってこと。それを青木が受け入れるかどうかは分からないけど、他の男を思っている女に支えてもらっても、俺なら嬉しくないな」

達樹が、クシャリと笑い掛けて来た。

「涼さ、今まで生きて来た中で、今が一番てんばってるぞ。そんな、涼の思いを踏みにじったら、お前だって、一生後悔するぞ」

達樹の言葉にコクリと頷いた。

マネージャーの思い

達樹がグラウンドへ戻った後、そのまま廊下に立ち尽くしていた。窓に目を向けるとグラウンドに涼の姿が見えた。

サッカーボールを追って、元気に走り回っている。

いつもの光景だった。

涼の少し前屈みになって走る癖。

華奢な身体のわりに筋肉質で、がっちりした両脚。

失敗すると、天を仰いだり、大げさに頭を両手で覆ったりする仕草。

どんなに遠くても、涼の姿なら直ぐに分かる。

あんまり近すぎて、ここまで涼のことをここまで思っていた自分に今ごろ気付いた。

涼も遠くからでもわたしの姿が分かるのだろう。

お互い、それほど相手を思い合っていた。

この上ない幸せだと思った。

あのマネージャーはわたしたちと同じような気持ちで、いつも青木クンを見ていたんだろう。

ただ、元気で野球をする青木クンを。

そんな青木クンを、あのマネージャーから奪ってしまった。

ただ、カッコイイからとかそんないい加減な思いだけで。

その上、わたしを庇って怪我をしたのだから、女としてもマネージャーとしてもわたしを許せないだろう。

カラオケで、涼の腕に抱き付き、隣に座った真菜に嫉妬していた。

自分がマネージャーに対して酷いことをしていたなど知らずに、ただ、真菜に嫉妬していた。

マネージャーに対しても、青木クンに対しても申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

青木クンのわたしへの思い。

どれほどのものか分からないけど、達樹が言ったように、自分が
気負いするほど大きなものではない気がして来た。

そんなことより、涼を思い続けたまま、青木クンと付き合っ
て行くほうが、青木クンを傷つけることになると思った。

青木クンが怪我をしたのは、わたしを庇ったからだ。

予想しない事故だったけど、そんな青木クンに謝ろう。

あのマネージャーにも謝ろう。

教室には向かわず、来た道を引き返して、青木クンのいる総合病
院へと向かった。

総合病院へ

青木クンが入院している総合病院は、学校近くのバス停からバスで5分ほどの距離なので、このまま歩くことにした。

学校へと向かう大勢の生徒たちに逆行しながら、下を向いたまま歩いた。

顔を伏せていれば、よほどの友達じゃないと声を掛けて来ないはず。

学校の敷地内を張り巡らせているフェンス伝いを歩き、朝の通勤ラッシュでもあるこの時間、車が終始行き交う国道に出た。そして、歩道を一直線に二キロほど歩いて、総合病院に着いた。

総合病院の玄関ロビーから入ると、外来患者と見られる患者たちが、たくさんソファに座っていた。

その傍を通ると、何人かの人がわたしに注目している。

この時間、学生服を着ている自分が場違いだと思い知らされた。

それでも、今の自分には、学校の授業なんかより大事なことだと思いつし、受付で、青木クンの病室の番号を聞いた。

青木クンの入院先は整形外科病棟だった。

額を切って血を流していた青木クンを思い出した。

どうして、整形外科病棟なのだろうか？

不安な思いが心の中にズシンと入り込んで来た。

足を速めて、入院病棟のエレベーターに乗り込んだ。

あのマネージャーは試合に出られないと言っていた。

額の傷だけなら、試合に出られないことは無いかも知れない。

整形外科病棟……

身体を震わせながら、エレベーター内の階を示す点滅する数字だけを見ていた。

青木クンの病室前で

受付で聞かされた病室の番号を探しながら、朝日がチラチラ差し込む廊下を歩いた。

看護師たちが忙しく動き回っている。

朝の検温だろうか？

面会時間外。面会時間は昼2時から夜7時とエレベーターを降りた直ぐの壁に貼ってあった。一度躊躇したが、思い直してそのまま歩き出した。

この総合病院はそれほど規則が厳しくないらしく、咎める病院関係者はいなかった。

慌ただしいナースステーションの前を通り病室まで来て、ノックをしようとして手を止めた。

病室内にだれかいるようだった。

引き戸になっているドアに三センチほどの隙間が出来ていて、そこから声が漏れて来ていた。

その場に立ちつくしたまま、少しだけ耳を澄ました。

力無い女の子の音がする。

「光輝……あんた、どうするつもり？ 三年の先輩たち、かなり頭に来ている状態だったよ。監督も授業が終わり次第、駆けつけるって言ってたけど、本当にどうするのよ」

さっき、学校にいたマネージャーの声だった。あの後、直ぐにここへ駆けつけたんだ。

「仕方ないだろ？ こうなっちゃったんだし。そりゃあ、先輩たちには申し訳ないと思ってるけど……」

落ち込んだ気味のやけっぱちのような青木クンの声がした。

「腰の骨に……ヒビって完治するのにどれくらい時間が掛るものなの？」

腰の骨にヒビ……

その言葉に固唾を飲んだ。

「さあ。一カ月から六カ月ってかなり大雑把な診断だったけど」

「六カ月？ 何それ……。光輝、あんた、彼女が出来たからって浮かれ過ぎてたんじゃないの？ 野球部全員に迷惑かけて、自分の体調管理が出来ないなら、彼女なんか、作るんじゃないわよ！」

涙ぐんだマネージャーの声が大きく響いた。

「彼女は何も関係ないだろ？ 真樹に言われなくてもみんなに迷惑かけたこと、反省しているし悪いと思ってる……」

「彼女を庇って自転車に跳ねられた、イヤ、追突されたんでしょ？ 自分の身体を考えないで、浮かれていた証拠じゃない」

「確かに……浮かれてたかもしれない。だけどこうなっちゃった以上は仕方ないだろ？」

「仕方ないですまされるの？」

「うるさい！」

ガン！

何かが壁に当たった音がした。

青木クンが力任せに何かを投げつけようだった。

「真樹に何が分かるって言うんだ！ すまされないって言うのは俺が一番分かっている。分かっているからもう、放っておいてくれよ！」

「わたしは……わたしは、ここまで頑張ってきた光輝が、試合に出られないのが悔しくてたまらないのよ！」

「お前に何がわかる？ どんな思いでここまでやってきたと思っているんだ。真樹が頑張って来たわけじゃないだろ？ そんなこと……俺が一番悔しいに決まっているじゃないか！」

「光輝……」

「帰れよ！ もう、帰ってくれよ！」

その言葉にわたしは、弾かれたように病室の前から逃げ去り、ナースステーションのカウンター前にあった開け放たれた空室へと身を隠した。

青木クンの病室で

部屋の前をマネージャーが啜り泣きながら通り過ぎた。

そのマネージャーの走り去る靴音がヤケに耳に響いて来て、胸が苦しくなった。

青木クンを思うがあまりのマネージャーの言葉。

その言葉に彼が声を荒げた。

青木クンはわたしを庇ってくれていた。そのせいで、彼女をも傷つけた。

原因はわたし。青木クンが怪我をして試合に出られなくなったのも、全て……わたしのせいだ。

そう自分を追いつめると、胸がムカムカして、喉の奥から嗚咽が出て来た。

全て、わたしの軽い返事からこうなったんだ。

わたしがみんなの日常を狂わせた。

胸を押さえたまま、青木クンの病室へと視線を向けた。シーンと閉ざされた病室の中で、青木クンはどのような思いでいるのだろう。眼を瞑って、青木クンを涼に置き代えて見た。

小学生の頃がずっと頑張ってたサッカー。

中学、高校と続けて来て、授業前の朝連にだって、サボらず真面目に参加して頑張っている涼。

もし、誰かのせいで、涼が試合に出られなくなれば、今のわたしなら、あのマネージャーと同じように相手に怒りをぶつけるかもしれない。

ずっと頑張っている涼を見て来たから、マネージャーの気持ちは痛いほど分かる。

青木クンの思いとマネージャーの思いを想像するだけで申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

謝らなきゃ。

青木クンに怪我をさせたことを謝らなきゃ。

罵られても仕方が無い。

鉛がぶら下がったような感覚の重い足取りで病室へと向かった。病室の前まで来て、一度立ち止まり大きく深呼吸をした。

コンコンとノックをしてドアを開けると、柔らかな朝の日差しに包まれて、ベッドに横たわる青木クンの姿があった。ドアをノックした音に気付いて、わたしを見た青木クンが、まるで蕾が綻んだような笑い顔を浮かべた。

胸の奥深い場所が何かにギュツと掴まれた感じがした。

「沙都ちゃん……来てくれたんだ」

「うん」

「もしかして、学校サボった？」

「うん。青木クンが気になって……整形外科病棟に入院していたから驚いた」

「ごめん。びっくりさせたね。歩くと少し痛むくらいで自覚症状は全くないんだけどさ。腰と足の付け根にヒビが入ったみたい」

「ヒビが……ごめんなさい。わたしを庇ったせいで、本当にごめんなさい」

ベッドから一メートルほど離れた場所で、何度も頭を下げて謝った。

「ちょっと……そんなに大げさに思わないでよ。沙都ちゃんのせいじゃないから。あの場にたまたま居合わせて、運が悪かったただけだから」

「でも、本当ならわたしが衝突されていたんじゃない……」

「二人同時に衝突されていたかも知れないじゃない。沙都ちゃんだけでなく衝突免れたから良かったと思うけど」

「わたしを庇わなきゃ……青木クンは逃げ出せたんじゃないの？」

「沙都ちゃんだって、膝に怪我したじゃない。誰が悪いかって、そんなこと言い出したらキリがないよ。もう少し、カラオケ店に居れ

ばこんな事故に巻き込まれなかったから、そうならばその時間に席を立った俺のせいになるし……ね？　キリが無いでしょ？」

さっき、マネージャーに声を荒げていた青木クンとは別人のように思えた。

青木クンの本音

視線を床に落とすと、さっき青木クンが力任せに投げつけたと見られる缶コーヒーのスチール缶が凹んだ状態で足元に落ちていた。

何気にしゃがんで、それを手に取った。

顔を上げると、嬉しそうな顔をしていた青木クンが一変して真剣な面持ちになった。

視線は、わたしが手にしている凹んだ空き缶へと向けられていた。

「ごめん。本当は、俺、全然余裕なんか無いんだ」

「青木……クン？」

「それ、投げつけて、凹ませたの俺だし」

青木クンの眼に暗い影が差し込み、声のトーンも重くなってマネージャーと話していた時と同じになった。

「こんなことになって先輩たちに顔向け出来ないし、この先のことを考えると……全然余裕なんかないんだ。こうなってしまった以上は仕方ないと思うけど、俺が抜けたことに寄ってチームが乱れたりしないかと不安で押し潰されそうになるんだ」

そう言っってベッドの上の白いシーツを両手で握りしめた。

青木クンが本音を喋りはじめた。

声を震わせて……

本音を喋りはじめた。

「みんなに迷惑掛けて、どの面下げて復帰出来るんだとか……もう、野球が出来なくなるんじゃないのか？ってそんなことばっか考えてる」

「ごめん……青木クンごめん」

「だから……沙都ちゃんは悪くないんだって。俺こそ……ごめんね。俺の本当の心の内を打ち明けちゃったりして……」

「ううん。無理して笑顔作られるより、本当の気持ち言ってくれた方がいいから」

そう言って駆け寄り、青木クンの目線に合うようにベッドの傍でしゃがんだ。

「沙都……ちゃん。俺……全然カッコ良くないだろ？　こんなことでメソメソしたりしてさ。呆れるよな」

青木クンから眼を離さず思い切り顔を横に振った。

「ううん。そんなことない。それが……当り前だよ。誰でもそうなるって」

青木クンがニコリと笑った。

「沙都ちゃん……優しいね」

シートから手を伸ばして、ギュツとわたしの手を握りしめて来た。冷たい手だった。

青木クンの冷たい手を握り返して言ってしまった。

「わたし……が傍に居るから……元気出して」

学校をさぼって

病室を出てから、学校には帰らず、そのまま家に帰った。

家は、ママもパートに出かけた後だったらしく、誰もいなかった。合鍵で家の中に入り、そのままカバンを机の上に放り投げて、ベッドに倒れ込んだ。

仰向けになったまま、天井を見上げると、涙が頬を伝い始めた。

青木クンを放っておけない。

あんなに弱気になっている青木クンに、別れようとはどうしても言えなかった。

この先、監督や野球部員たちやマネージャーに責められて、もつと弱気になるんじゃないかと思うと……別れようとは言えなかった。そして、自分の中にも確かなものが芽生えていた。

涼と青木クンとの間で揺れ動いていた気持ちだが、はっきりとした形で、現れていた。

このまま……青木クンの傍にいて、助けになりたい。

無力なわたしだけ……助けになりたいと思った。

だから、もう……涼とは付き合えない。

今までどおり、ただの幼なじみの関係に戻ろう。

涼が好きだけど……

涼が好きで堪らないけど……青木クンの彼女になるとそう、心に決めた。

眼を瞑れば、涼の顔ばかりが浮かんで消えた。

涼の笑った顔や、拗ねた顔がまるでスライドショーのように浮んで消えてを繰り返した。

そして最後に、涼に抱きしめられた時のことを思い出した。

あの時、何度も好きだと言ってくれた涼。

わたしも……呪文に掛ったように涼が好きと答えていた。

抱きしめ合って、初めてお互いの肌の温もりに触れて、幸せで……

…心が満たされていた。

「涼……」

嗚咽を吐きながら何度も涼の名前を呼んでいた。

そして、泣き疲れて、そのままの格好で眠りに落ちた。

涼の部屋へ

蒸し暑い部屋の中で、ベツトリ寝汗をかいた状態で眼が覚めた。白い天井が歪んで見える。昨日から泣いてばかりいるせいかな、眼がヤケに重い。

もう一度眼を閉じて、睫毛に滲んでいる乾きかけの涙を手の甲で拭った。

瞼と同じように重い身体を起こし、汗ばんだ腕を伸ばして、枕元の目覚まし時計を見ると三時を回ったところだった。

結局学校へは、何も連絡せずに無断で休んでしまった。

ベッドから起き上がって、机の上のカバンから携帯を取り出した。病院に入るなり、電源を切っていた携帯には、たくさんのメールや着信ありの表示が出ていた。履歴を見ると、涼からのものほとんどだった。

一緒に登校したにも関わらず、居なくなったわたしを必死で捜そうとしたらしい。

達樹から話を聞いていると思うので、青木クンの病院へ向かったと想像は出来ただろうけど、それでも電話や『今、どこ?』と書かれたメールが何着も入っていた。

嘘がばれて怒っているだろうか?

怒っているなら、涼はメールさえして来ないはず。

ただ、わたしが心配で仕方がなかったんだろう。

メールも着信履歴も昼休みを終えた時間が途絶えていた。

一時を最後に、涼からの履歴は無かった。

返事を寄越さないわたしにキレたように思えた。

電話やメールじゃなくて、直接涼に会って話がしたかった。

かと言って、青木クンの噂話に持ち切りであろう学校へは行く気がなかった。

『厄病神』

マネージャーの言葉の通り、そう思われて当然で、数奇な視線を浴びせられるのは眼に見えている。

涼に会いたい……

別れを言い出さなきゃいけないのに……

涼が怒りだすかも知れないのに……

ただ、涼に会いたかった。

青木クンと付き合って行こうと決めたにも関わらず、涼に甘えようとしている自分がいた。

それは、虫の良過ぎる話だと分かっているけど、涼の傍に居たかった。

今まで、どんな辛い時も涼がいたから乗り切れて来たから。

ただ、涼に会いたい。

閉め切っていた窓を開けて、ここから見える涼の部屋の窓を見つめた。

誰もいない涼に家を暫くボンヤリと見つめていた。

そして、携帯を握りしめたまま、もう一度ベッドに倒れ込み、熱く腫れぼったく感じる瞼を閉じた。

キィー

キィーキツ

開け放たれた窓の外から聞こえた自転車のブレーキの音。

ビクリとして眼が覚めて、ベッドから飛び起きた。

部屋の中はオレンジ色の西日に包まれていて、急いで窓に駆け寄り、外を見ると涼がガレージに自転車を入れているところだった。

涼が学校から帰って来た。

いつもより早い時間の帰宅だった。

自転車を置いてから、チラリとこちらに眼を向けて来た。わたし

に気付いた涼は、二コリともせずに、そのまま眼を逸らして玄関へと向かった。

かなり、怒っているようだった。

涼が家の中へと入ったのを見届けると、わたしは直ぐに部屋を飛び出した。

いつものように、勝手に涼の家の玄関を開けて、二階にある涼の部屋へと階段を駆け上がった。

一回、涼の部屋のドアの前で大きく息を吸った。

「涼……いる？」

返事がなかった。

ドアをコンコンと叩いてから

「涼？　いないの？」

ドアノブに手を掛けて、捻り開けようとする

「入ってくんな！」

ドアノブを持ったまま、その怒鳴り声に弾かれて、そのまま立ちつくした。

「涼？　ごめん……電話くれてたのに、ごめん。青木クンの事故のこと聞いた？」

「聞いた。青木、お前を庇って事故ったって、みんな噂してたよ。隣のクラスの野球部のマネージャーは一日中ずっと泣いてたって言ってた」

「……」

「達樹に聞いたけど、沙都、お前……本当は青木に別れようって言うてないんだろ？」

「ごめん……涼、嘘付いてごめん。昨日は、どうしていいか分かんなくて、涼に嘘付いた。だから、ちゃんと話すから中に入っている？」

「お前……今日は青木の病院に行ったんだろ？　青木はお前を庇って怪我して、それで……どうするつもりだよ」

「涼……」

「お前なら、そんな青木を放っておけないだろ？」

「涼……」

「分かってるよ。沙都がどんな性格か、俺が一番分かってるよ！」

「涼……」

「青木とこのまま付き合うんだろ？」

「涼……」

「だから……もう、この部屋には入ってくんな！」

突き離すような涼の言葉。

それと同時に、少しだけ開いていたドアが押し戻され、中から鍵をかけられた。

涙がワツと溢れてきた。

ドアをドンドン叩いきながら

「涼……開けて。そんなの嫌だよ。青木クンとは、涼が言ったように付き合って行こうと思ってる。でも、涼にこんな風に突き離されるの嫌だよ」

「沙都、お前、青木と付き合っても、今まで通り俺の部屋に出入りするつもり？」

「うん。だって……涼は幼なじみだし、兄妹みたいなもんだし……ずっと一緒だったじゃない。学校から帰って家に誰もいなくても、涼がいたから寂しくなかったんだよ。このまま突き離されるの嫌だよ」

「沙都とは……もう、無理だよ。俺ら、一線越えちゃったし、この部屋に入ると俺はお前に何するか分かんないぞ。沙都は俺にとってもう、女なんだ。幼なじみでも、兄妹でもない。もう、女なんだ！ だから……二度とこの部屋に入るな！」

涼の言葉

「そんなの……涼は涼で、わたしはわたしじゃない！」

「もう、沙都はただの幼なじみなんかじゃないんだ」

「そんなの嫌だよ。涼……そんなの嫌だよ。涼が傍にいないと……わたし、嫌だよ」

ドアを叩きながらズルズルと力なく座り込んだ。

「俺だって……沙都を諦めんの嫌だよ。けど、こうなっちゃまった以上はお前、青木を振り切れないだろ？　振り切れるか？」

涼の問いに即答出来ない自分がいた。

「青木……俺と一緒にスポーツ特待生だって知ってるか？　授業料とかも免除されてるらしいけど、それも危うくなるんじゃないかって、噂しているヤツもいたんだ。俺、それ聞いて……人ごとじゃなくてさ。今の青木の気持ちも……なんか……分かるんだよ。スゲー落ち込んでいるんだろうなって。そんな状態の青木をお前、突き離して俺のどこに来れるのか？」

涼と同じ立場の青木くん。

二人、同じようにそれぞれ野球とサッカーを頑張って来た者同士。

『青木の気持ちも分かる』

そう言った涼の言葉を復唱して眼をゆっくりと閉じた。

余裕のない青木クンの表情を思い浮かべた。

わたしは……あんな状態の青木クンを振り切れない。

「野球もサッカーも運動クラブの中じゃ、花形でさ。色んなところら注目浴びて、スゲープレッシャー掛ってるのも分かるんだ……そこんところは、沙都より、俺の方が青木の気持ちはよく分かるつもりだよ。それに沙都はへんなとこで責任感が強いってことも、色んなこと考え過ぎて、欲しいものを欲しいって言えないことも……俺が一番よく知ってる」

「涼……わたし、欲張りかな？　青木クンの彼女になっても、涼の

傍に居たいって思うわたしは、欲張りかな？」

両手で顔を覆いながら、泣き崩れた。

「男と女は違うんだよ。お前は青木の彼女なんだから……もう、この部屋には来るな」

「涼……」

「青木の……傍にいてやれよ！」
ドン！！

涼が部屋の中の壁を叩いた。

やり切れない怒りをぶつけた音が響いた。

涼がぶつけた怒りのその音に、フツと肩の力が抜けた。

体中に入っていた力が、ダラリと抜けて、冷たく閉ざされたドアを見つめた。

『青木の傍にいてやれよ』

本意じゃない、そう言うしかない涼のこの言葉が……

胸の中にズシリと圧し掛かった。

その言葉だけが耳の奥に響いて来て、カラカラに乾いた口からは、何も言い出せなかった。

あれだけ溢れていた涙も止まった。

ボンヤリとした思考のまま、ゆっくり立ち上がって涼の部屋を後にした。

薄暗い部屋の中で、灯りも点けずに窓を見ていた。

涼の泣いている姿が見えているわけでもないのに、楽に想像出来て、ただ、閉ざされた窓を見ていた。

小さい頃から、どちらかが泣くと、お互いを慰め合っていた。

いたずらして叱られて泣いている涼を『そりゃあ、涼が悪いよ』と責めながら慰めていた。

女友達とケンカしてわたしが泣いた時は、『沙都も悪い』と笑い

ながら慰めてくれた。

そんな風に、慰め合うこともできなくなると思うと寂しくて、どうしようもなくなった。

青木クンの気持ちが分かるから……

わたしを突き離すことしかしなかった涼。

涼は昔からわたしなんかより何倍も優しい子だった。

相手を思い過ぎて、勝負ごとに向かない性格だって、達樹にいつも言われていた。

そんな優しい涼を傷つけた。

『青木の傍にいてやれ』

そう言うしかなかった涼の気持ちが痛いほど分かる。

わたしは……

青木クンの傍にしよう。

青木クンの助けになるように……傍にしよう。

そうすることが、涼の優しい気持ちに答えることが出来るんだと

……

そう、自分に言い聞かせた。

夏休みに入って

次の日、いつも通り学校へ登校した。

教室へと続く廊下を歩いていると、あの真樹と呼ばれていたマネージャーの友達からは『厄病神』の声を浴びせられた。

教室に入ると、クラスメイト達からは、思った以上に数奇な眼で見られているのがヒシヒシと分かった。

そんな視線に挫けそうになったけど、教室の一番後ろの席にいる涼を少しだけ視界に入れて、気分を落ち着かせた。

わたしと視線を合わそうとしない涼だったけど不思議と姿を見るだけで気分が落ち着いていた。背筋をピンと伸ばして、何事にも動じず、やるだけのことはやろうと心に決めた。

明日からは夏休みと言うこともあって、授業はなく、ただ、慌ただしく過ぎて行った。

そして、わたしはチアリーダー部の顧問の先生に、休部届を出した。

期間は未定だったが、一応夏休み中の間だけと、頭を下げた。

膝の調子も良くないこともあり、部活を休部することにした。

休むほどの怪我ではなかったが、毎日青木クンの病院に通う為に夕べから休部を決めたいたのだ。

続いて部室に向かって、キャプテンや先輩たちに頭を下げた。

同じ部の真菜は、休部すると告げたわたしに、

「沙都を応援する」

と言ってくれた。

「変わりに涼のことも応援してね」

と付けくわえて来たので、ニコリとだけ頷いてその場をやり過ぎた。

学校から一旦家に帰って、私服に着替え、青木クンの入院する総合病院へと向かった。

病院に着いて、病室に向かうと青木クンと青木クンのお母さんが居て、昨日はパジャマを着ていた青木クンが私服でベッドに腰かけていた。

部屋も綺麗に片付いている。

「沙都ちゃん。来てくれたんだ」

わたしの出現に座っていた青木クンがゆっくりと立ち上がった。

「あれ？　どう言うこと？」

綺麗に片付いている病室内を見渡しながらそう聞いた。

「うん。ごめん。連絡出来ていなくて。あのね、野球部の監督の勧めで転院することになったんだ」

「転院？」

「うん。監督の知り合いの病院。リハビリ施設が整っているらしくてね」

「遠いの？」

「うん。学校からは遠くなるかな？」

「高井さんだっけ？　よかったら、転院先へ車で一緒に行きましよう」

青木クンのお母さんがにこやかに話しかけて来た。

「はい。青木クン歩けるの？」

「うん。少しくらいならね。コルセットしているし、痛みもそれほどないんだ。それに半分はスポーツ疲労骨折みたいなもんだし」

青木クンがくつきりした二重の眼をこちらに向けて舌を出した。

「スポーツ疲労骨折？」

始めて聞く言葉だった。

「そうなのよ。事故だけが原因じゃないんだから、高井さんは責任を感じないでね」

青木クンのお母さんが青木クンによく似た笑顔でそう言ってくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5429y/>

初めては幼なじみ

2012年1月12日16時57分発行